

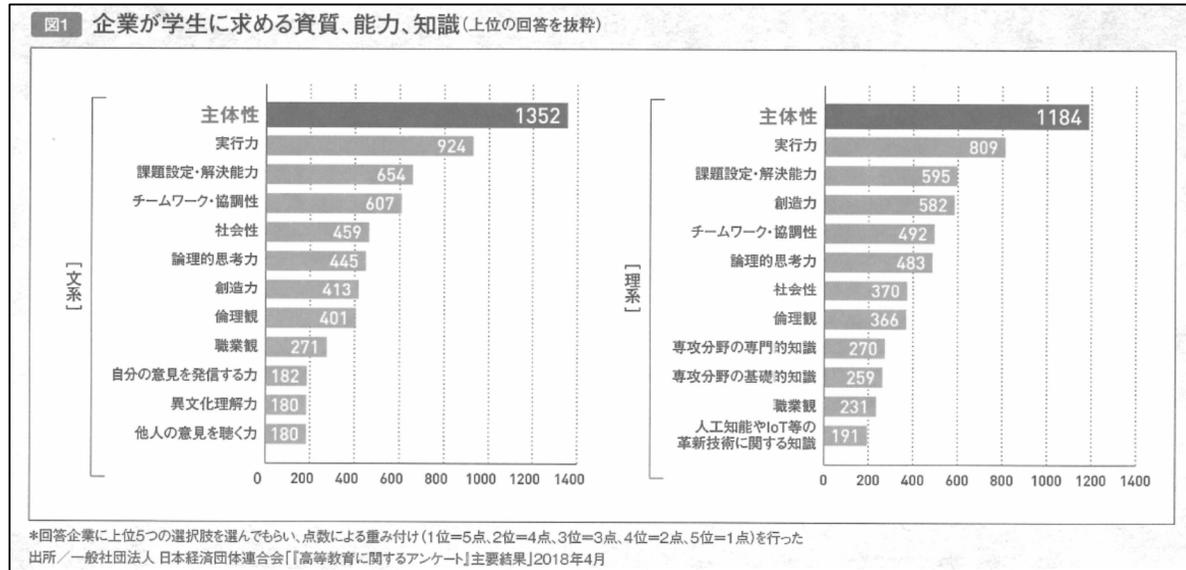
進路通信 2018/12 号外

北海道釧路湖陵高等学校進路指導部

1. はじめに。～今求められている資質・力～

「やらされる勉強からの脱却」こそが、学力を上げるのに1番効果的なことです。これは、部活の練習でも同じでしょう。同じことをやるっていても、「今までやっていたからなんとなくやっている」、「先生に言われたからなんとなくやっている」、そんな風に思って取り組むよりも、「この練習にはこういう効果がある」と練習の意図を見いだして取り組む方が上達につながるはず。勉強も同じです。出された課題を「やらないと怒られるから、ただやっている」という状態では、「やらないよりはまし」という程度の効果しかないはず。先生たちがやっても意味ない課題をわざわざ生徒に課すでしょうか。「課題を通じて身につけて欲しいこと」があるから課題を出すのではないのでしょうか。自らその意図を考えた上で課題に取り組めばより高い効果が得られるはず。また、課題に対するモチベーションも上がるでしょう。

自分が取り組まなければならないことに対して自ら意図を考えて実行する力は、これから社会に出る人たちに求められています。下に紹介しているのは「日本経団連」が行ったアンケートの結果です。



このグラフからわかるように、企業が学生に求める資質の1位は、文系、理系問わず「主体性」になっています。この主体性こそ、先ほどに書いた「自ら意図を考えて実行する力」になります。また、企業だけでなく、再来年から本格化する高大接続改革におけるキーワードの1つ「主体的に学びに向かう力」でもあります。大学受験でも主体性が求められているのです。

今回の進路通信では、この「主体性」について考えていきます。

2. 企業が考える主体性。

リクルートが発行している冊子に、3つの企業が求める主体性が紹介されていました。

○株式会社 JTB (大手旅行会社)

高い専門性をベースに成果を生み出すことに意欲的に取り組み、すべての局面で自立的・

主体的に行動できる人、常に主体的に自己成長できる人

○Chat Work 株式会社 (急成長する IT 企業)

自ら課題を見つけ、分析し、それを改善していける思考性と行動力がある人

○株式会社ウィル (兵庫・大阪エリアで不動産に関わるワンストップサービスを展開)

目的を理解したうえで、自身のアイデンティティをもち、自らの意思で実行していける人

この3社が求める主体性に共通していることは「自ら課題を発見し、それを解決するために自ら行動すること」とまとめることができます。重要なのは前半です。つまり「自ら課題を発見できる力」です。この力を備えた上でさらに課題を解決しようとする姿勢があることを企業は求めているということがわかります。

急速に変化し続ける世の中において企業が成長していくには、求められることは何か、それを実現するために必要なことは何か、既存の答えがない問いに対して自ら考え、実行していける力をもった人材(主体性のある人材)が必要なわけ。主体性があるかどうかは採用試験で問われるわけですから、採用試験を受けるまでにある程度培っておかなければなりません。

3. 大学が考える主体性。

さて、次に大学が考える主体性を探ってみましょう。大学入試改革のキーワードに「主体的に学びに向かう力」があると書きましたが、現時点でも大学は学生にその力を求めています。主体性が感じられない学生が増えて困っているから、あえて文言におこし明確にただけです。では、大学が求める主体性とは具体的にどのようなものなのでしょうか。東北大学が主催するフォーラムの中で、大学教員が考える「主体的な行動」が紹介されていました。

<大学教員が考える主体的だと考えられる行動の例>

- ・課題に対して、他の学生と進んで議論している
- ・研究室に質問にくる
- ・指示していない課題に取り組む
- ・講義中に、板書の内容に疑問が生じて質問をする
- ・学外での企画参加

皆さんの中には「当たり前なことでは？」と思う人もいるでしょう。特に大学受験を間近に控えた3年生であれば、今まさに実行している人も多いのではないのでしょうか。これらをまとめると「自ら学びを深めようとする姿勢や行動」ということができるでしょう。

また、このようなことは大学教員の1人1人が別々に考えているのではなく、大学全体としても学生(受験生)に求めています。各大学が示している「アドミッション・ポリシー(入学者受入方針)」にそのことが書かれています。はじめに、旭川医科大学ののを見てみましょう。

旭川医科大学

医師・看護職者としての適性とともに関心を持ち、自らが問題を見つけ解決する意欲と行動力を持つ学生

(HPでは、より詳しく書かれています。志望している生徒は必ず確認しておきましょう。)

このように、「自らが問題を見つけ解決する意欲と行動力を持つ」ことを学生(受験生)に求めていることが明記されています。

次に道内の国立大学である北海道大学と小樽商科大学の2校について見てみましょう。

北海道大学

歴史と伝統を継承しながら広く世界に優秀な人材を求め、学士課程教育を受けるにふさわしい学力、すなわち基礎知識・基礎技能・数理能力・語学力・理解力・読解力を備えた学生、また、大学入学以降の学びに必要な問題解決能力・創造力・倫理性・思考の柔軟性・コミュニケーション能力・論理的思考力・リーダーシップ、人間性や学ぶ意欲などを備えた学生

小樽商科大学

- (1) 社会人で、新規事業開発や事業革新、あるいは既存組織の改革を目指している人
- (2) 医歯薬理工系大学出身者や研究者で、技術シーズで新規事業を開発したいと思っている人
- (3) 社会人、学生、留学生で、起業家への夢を抱いている人

どちらの大学にも主体性を求める直接的な言葉は書かれていません。では、主体性を求めているのでしょうか。少し視点を変えてみましょう。

北海道大学は最後の部分に「学ぶ意欲」で求めています。また、小樽商科大学が各項目で求めているのは「目的意識」をもっていることです。ここで、大学教員が求める主体性を振り返ると、「自ら学びを深めようとする姿勢や行動」でした。これと各大学のアドミッション・ポリシーを合わせて考えると、大学は、「意欲や目的意識があることが、自ら学びを深めようとする姿勢や行動につながる」と考えているのではないのでしょうか。学ぶ意欲があれば、自ら積極的に学ぼうとするはずで、また、目的意識をもって入学してきたのであれば、何を学ばばいいか、学んだことをどう生かしていくべきかを自ら考えるはずで、これこそが主体的な行動です。北海道大学も小樽商科大学も求める学生像に主体性という言葉こそ使っていませんが、主体性のある人物になることを求めているわけです。

そして、これは企業が求めている主体性（「自ら課題を発見し、それを解決するために自ら行動すること」）につながっています。企業が求める主体性は、意欲や目的意識を行動に移していく過程で培われています。目標を達成するためには「足りないことを自覚し、克服するには何をすべきかを考え、それを行動に移す」ということをするはずで、このような経験を積んでいくことが主体性を高めていくわけです。

4. 今、何をすべきか。～ふりかえりで弱点克服～

社会（大学や企業）が求めている主体性を身に付けるために今の皆さんがすべきことは何でしょうか。ただ漠然と日々を過ごしていても主体性は身に付きません。大学は、入学段階で「主体性」もしくは「主体性につながる素養」をもっていることを求めています。これらをみなさんは高校生活の中で身に付けていかなければなりません。

主体性を身に付けるうえで重要なことは「ふりかえり」です。ふりかえりとは、自分のことを客観的に認識することです。ふりかえることで、自分に足りないこと・改善すべきことが見えてきます。そして、足りないこと・改善すべきことがわかれば、やるべき行動に移れるはずで、これこそ主体性のある行動です。つまり、ふりかえりは、主体的な行動において最初に行うことなのです。

ふりかえりは高校生活でも多くの場面で問題を解決してくれます。例えば、志望進路の決定です。志望する進路を明確にするなかで次のようなことを考えるのではないのでしょうか。

1. 自分が将来何をしたいか、どうなりたいかを考える。

2. それを実現するためにすべき大学・専門学校を考える。

これらがはっきりとすればある程度進路は決まります。しかし、なかなか決められないという人も多いでしょう。決められない理由にこそ自分が克服すべきことが隠されています「これははっきりしないから決められない」と自覚できれば、「はっきりさせるには何をすべきか」を考えましょう。何をすべきかわかれば実行するだけです。これを繰り返せば少しずつ進むはずで、

また、もっともふりかえりが要求されるのが勉強（学力を上げる努力）です。勉強の仕方よく目にするのが下にも示した「PDCAサイクル」です。



このサイクルのCHECKがふりかえりです。このサイクル自然とうまくまわっている人は、大学や企業が求める主体性をある程度身に付けていると言えるでしょう。しかし、このサイクルをうまくまわっている人が少ないように感じます。そこで、2年生向けに行われた講演会で駿台予備学校の方がこのPDCAサイクルについておっしゃっていたことを紹介します。それは「まずはDOから始めてみよう」というものです。「多くの高校生はPLANから始めて計画倒れに終わってしまう。だから、まずは日々の勉強を記録に残すことから始めて、日々の勉強をふりかえって次はどうすべきか（どこなら改善できそうか）を考え、改善案を計画し、そして実行してみよう」ということでした。実際に行った自分の行動をふりかえって作る改善案だと「無理な計画」にはなりにくいのだそうです。

ここで紹介したように、ふりかえりによって、問題をより具体的に考えられるようになります。そうすれば解決に向け自ら行動できるようになるわけです。

5. 冬休みの過ごし方。～ふりかえりからはじめてみよう～

今社会で求められている主体性は、「課題を見つけ、解決しよう」と行動することであると紹介しました。冬休みは、まさにこの行動がしやすいと思います。1、2年生は課題テストや1月模試、3年生はセンター試験があります。これらの試験を受けるにあたって自分が抱える課題は何か見つめてみましょう。課題が見つければ、その課題を解決するためにすべきことが何かを考え、行動するだけです。1、2年生は、長期休みの課題に対するモチベーションがあがるはずで、また、センター試験に向かう3年生は、「自分が克服すべきことの中で、残された時間でできることは何か」を考えてみましょう。それが見つければ「こんなことしていいのかわかるか？」という不安は解放されるでしょう。時間の取りやすい冬休みに、是非、自分にとっての課題を探すところからやってみてください。

これがまさに「やらせる勉強からの脱却」です。そして、社会が求める主体性を磨くことにもなります。この冬休みを有意義なものし、新年をいいかたちでスタートさせましょう。